

## おわりに

筆者は、「教育を考える」ことをライフワークとする大きな志を持って研究活動に励んでいる。本論文はそのライフワークの通過点に過ぎない。この論文の主題である「国民国家」公教育体制批判に取り組もうと思いついたのは、多様な文化的背景を持つ子どもたちに対する教育行政の対応と学校教育現場の実践を整理し、その課題の探求を行った修士論文作成の段階においてである。外国籍の子ども急増など多文化化が進む教育現場において学校という体制の限界に立ち向かう教師や日本語教育ボランティアの姿を目の当たりにし、研究者の役割のひとつである理論探求を行うことで、現代社会に生きる子どもたちの抱える課題の解決策を導きたいと考えた。

本課程の3年間、多文化教育、カナダ教育研究、比較教育学理論探求の三つの関心領域に沿って、教育学研究科における演習や有志の研究会におけるディスカッション、研究プロジェクトへの参加など多様な方法で、教育のあり方を考えてきた。また、特定非営利活動法人多文化共生センター・東京21を媒介にした縁に関心を共有する人々と出会い、自分自身でできる限りフィールドに足を運び、教育の場面、子どもたちの息づかいの聞こえる場所に身を置いてきた。関心の赴くままにずいぶん欲張って行動をした結果（悪く言えば、地に足のつかない状態で研究活動を進めることになってしまった）三つの関心領域をそれぞれに深め、そこから得た知見を結集させた総合的な論文を作り上げることができた。しかし、筆者は本論文をライフワークの通過点と位置づけており、それゆえ、本論文において言及し切れなかった問題や拡大化・多角化できなかった視座を今後、扱っていくという課題が自身に残されていることも自覚している。

本論文の指導教授である鈴木慎一先生からは温かい助言と励ましを常にいただき、研究者としての多大な影響をも受けた。鈴木先生の勧めで国際会議における発言機会を持ったことは、広い視野の獲得、多様な視座があることへの気づき、そして、何より教育を通して語らえる人々との出会いにつながり、筆者の研究者としての使命感、研究への意識や意欲を高めるきっかけとなった。また、本論文の副査を快く引き受け、率直かつ深みのある助言、指導を下さった小林順子先生、前田耕司先生、長島啓記先生に感謝の意を記したい。そして、本論文作成にあたってデータ入力などの力添えと度重なる教育論議においてその豊かな感性によって多くの刺激を与えてくれた吉田重和君に謝意を表す。最後に、昨夏に11年間の生涯を終えるまで筆者の帰省ごとに穏やかな時間を共有し続けてくれた愛犬・ハリーを含め、大阪・寝屋川に暮らす家族からは、惜しみない愛情と援助を受け取った。本論文執筆の支えであった。どうもありがとう。

2003年2月・筆者記す